

『隣の人の困った話』 感覚の
わかりやすい相続本を出版

——「夫に読ませたくない相続の教科書」（文春新書）というユニークなタイトルの書籍を出されていますね。はじめに、本書の発刊の経緯についてお聞かせください。

板倉 相続の本というと、男性の税理士先生が書かれている実務的な専門書が多かったので、一般人にでもわかりやすい内容で書いてみたいと。そうして実現したのが、『夫に読ませたくない相続の教科書』でした。

実は、企画の段階では『もめる相続は鬼ばかり』というタイトルだったんです。「渡る世間は鬼ばかり」をもじったもので、ドラマの登場人物を立てて、相続についてわかりやすく紐解いていこうという試みでした。「渡鬼」の潜在視聴者数は数百万人。年代も50歳代から70歳代と、ちょうど相続を考えなければならぬ世代と合致

「円満な相続を実現するためには、 家族の心の機微を理解できる、 女性の視点でみるのが大切です」



平成27年1月以後の相続税改正を前に、
いま、相続対策への人々の関心が高まっている。

女性は人生で6回相続を経験する——。

平均寿命が延びる中、人生で何度も相続を経験するのが女性だ。

『夫に読ませたくない相続の教科書』の著者、税理士の板倉京氏に、
女性の視点でみる相続問題と円満な相続を迎えるためのポイントについて、
お話をうかがった。

編集部=聞き手・構成 大野真人=写真

株式会社ウーマン・タックス
代表取締役 税理士
板倉
Miyako Hakura

京
氏

しているのです。それらの人々に相続対策の重要性について訴求できればと考えたわけです。

結果的に、当初のタイトルはかなわず、『夫に読ませたくない相続の教科書』と決まりましたが、内容については、初学の読者にもわかりやすいように事例を豊富に盛り込んで、専門用語にも説明を加えるなど、工夫をほどこしました。隣の人の困った話をともだち感覚で聞いているような、そんな週刊誌的な読み方をしていただけたら嬉しいですね。

——相続セミナーの講師をされる機会も多いのではないのでしょうか。参加者の反応はいかがですか？

InterView
FP opinion
Vol.49